

教養としての自己健康管理

谷村秀彦

元社会工学系教授 元第三学群長

筑波大学では、開学以来、共通科目の体育は学群の4年間、必修科目とされていたが、平成3年のカリキュラム大綱化によって、この全学的な縛りがなくなり、第2外国語や国語と同じように、どこまでを必修とするかは教育組織ごとの裁量に任されることとなった。多くの学類が体育の必修を2年までに限定した中で、社会工学類は検討の結果、4年生までの必修制を維持することになった。この必修制は今でも引き継がれている。大綱化のときの社会工学類長として何か書いておきたいと思い、この原稿をお引き受けすることになった。因みに、国語については、社会人としての報告書の書き方やマニュアルの書き方などの技術日本語を教えて欲しいと交渉したが、国語の先生方に受け入れていただけなかったので必修からは外すことになった。また、第2外国語については、上級英語と第2外国語の選択必修とすることになった。

体育の必修制を維持することになった理由は大きく分けて3項目になると思う。第1の理由は、学生の意見を聞いたところ、圧倒的多数の意見として4年生まで必修にしておいて欲しい、これは我々の権利であるという声が聞こえてきた。3年、4年になると専門の講義が増え、卒論が多忙になり、体を動かす機会が少なくなるけれども、必修であれば堂々と体育の授業に行くことができる。もし、必修でなくなれば、その正当な理由がなくなってしまい、スポーツをする機会が失われる。高学年次生ほどこの意見が強かったように思う。

第二の理由は、学生の精神衛生に対する考慮があった。いわゆる「閉じこもり」の学生が問題になりはじめ、友人が声をかけて体育に参加することが内向的な学生を呼び出す良い機会だという視点があったと思う。高学年になると研究室・ゼミ単位で行動することが多くなる中で、

体育は狭い人間関係を越えて友好関係を維持する機会を与えているようだ。

第三の理由は、これからの高齢化社会において生きていくために「自己健康管理能力」を学生時代に育成することは現代人として身につけるべき大切な教養の一つであるという観点である。多くの学生は、社会に出ればサラリーマンとしての40年近い生活が待っている。さらに、定年後も20年近い期間、成人病と付き合いながら余生を送らなければならない。多くの成人病は、生活習慣病といわれる。学生のときにスポーツを楽しむ習慣をつけておけば、歳をとってからでも比較的簡単に再開することができる。全くしたことのないスポーツを中年になってから始めるには大変な意思の力がある。また、団体スポーツの場において学ぶことのできる社会における自己の位置づけ、自信、努力の意味などは、人間としての個の確立に大切な意味を持つものである。

このような検討の結果、4年次までの必修制を社会工学類では維持することになった。もちろん、反対の先生も少なくなかった。体育は何も学校で学ばなければならないというものではない、やろうと思えば自分でジョギングもできるし、スポーツクラブに入っても良い、本人の自由意志を尊重することが一番であるという意見が多かつ

た。4年になって卒論に集中して欲しいときに、学生が必修体育の授業だといって席を外すのは困るという声もあった。一見もっともな意見であるが、学生の意見を反対から裏付けるところもあり、結局、学類としては学生の多数意見に従い、必修制を維持することになった。その後、何回か見直しの機会があったが、学生側から必修を止めて欲しいという希望は出なかったように思う。

さて、中央教育審議会がまとめた答申の一つである「新しい時代における教養教育の在り方について」が最近、公表された。今後の新しい時代に求められる教養とは何か、それをどう培っていくのかという観点から、人の一生を幼・少年期、青年期、成人期に分け、段階ごとに求められる教養の課題を提示しつつ、具体的に提言したものとされている。しかしながら、驚くべきことに、自己健康管理能力については全くといってよいほど触れていない。わずかに幼・少年期における体育についてその意義に触れているのみである。礼儀・作法など型から入り、身体感覚として身に付けられる「修養的教養」については多く述べられているにもかかわらず、体育・スポーツの体験から獲得される身体感覚としての自己意識、自己健康管理能力を現代人の教養として残

念ながら把握していないのである。

この答申には、新しい時代に求められる教養の第一として、「社会とのかかわりの中で自己を位置づけ、律していく力、向上心や志しを持って生き、より良い新しい時代の創造に向かって行動する力」が上げられている。団体スポーツに参加することによって、私たちは社会と自分との関係を理解し、自己を位置づけ、向上心を持つことはまさに強調する必要のない自明のことであると私には思える。それだからこそ、学生スポーツがこれだけ盛んに行われ、多くの人がその意義を高く評価しているのである。スポーツの体験を通して、能動的に獲得するこのような身体感覚こそ、これからの現代人に必要な教養でなくて何であろうかと私は考える。

筑波大学の体育科学系は国立大学の中で最も有力な研究・教育者集団であると言われている。この答申に見られるような知識偏重型の教養論にぜひ声を上げて反論を試みていただきたいと思う。厚生労働省がこれから到来する超高齢社会を前にして、生活習慣病をいかに減らし、増加する医療費をコントロールしようとしているときに、一方の文部科学省が体育・スポーツを現代人の教養から追いやるようとしていることは、省庁間の縄張り

争いであるとしても全く整合性を欠いていると思われる。この答申において体育・スポーツが正当に位置付けられていないことに私は全く失望した。

しかし、大学で身につける教養としての体育・スポーツのコンテンツが今のままでよいというわけではない。大学生であるからには、体育・スポーツを経験し、自己の身体的能力を向上するために努力することの意義をよく理解するべきことはいままでもない。また、現代の最先端の医学、生理学などの知識に裏付けられた方法論に立脚していなければならない。大学生の知的好奇心を満足する水準のコンテンツを開発する努力が必要である。グローバルな時代に、国際的に行われているスポーツやそのルールを理解できることも重要である。外国語が十分にできなくてもテニスやサッカーを一緒に楽しむことによって、心の交流ができたと感じる留学経験者は多いと思う。まさにスポーツはグローバル時代の教養に他ならない。

本学の卒業生が卒業後の長い人生の中で、自己の身体に対する正しい理解を持ち、生涯にわたって自己健康管理能力を発揮することができれば本学の将来に大きな期待を持ってよいと思う。

(たにむらひでひこ 都市計画専攻)